

# 私たちの町「日頃市」 ～ふるさととの復興の力になろう～



岩手県大船渡市立日頃市中学校



# 日頃市中チャレンジプラン 2本の柱

## ＜防災教育＞

- ◆ 生き延びるための力を身に付ける
  - ・防災キャンプ
  - ・小中合同避難訓練
- ◆ 教科や行事の中に活動を取り入れる（日常化を図る）
  - ・運動会種目に
  - ・理科・家庭科で

## ＜復興教育＞

- ◆ 地域資源を生かした復興へ取り組み
  - ・椿の里づくり
  - ・被災地スタディツアー
- ◆ 中学生がふるさとを元気にするために活動する
  - ・タオルハンガー（恩送りプロジェクト）

# 防災教育

- ◆ 非常時に生き抜く力を身に着ける
- ◆ 教科や行事の中に活動を取り入れる（日常化を図る）

# 防災チャレンジキャンプ

～学校で24時間どうやって生き抜くか～



自分たちの力で何ができるか考え行動しよう



# 計画の流れ(生徒主体の計画立案)

## チーム分担

- 学年を「食」「住」「安全」の3チームに
- チームで活動プランを検討(チャレンジプランのレガシーを参考に)

## 案の検討

- 学年案を代表者会議で検討
- 意見を入れ改善

## 全体計画の作成

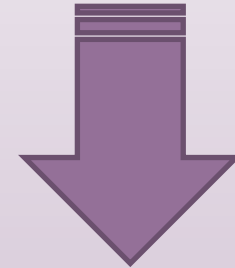
- 学年のプランをタイムテーブルにする
- 渉外・必要物品の準備を行う

学校に普段ある物を活かす。積極的に外部人材を活用する

# ①岩手大学 森本先生「防災講演会」



釜石東中の取  
り組みから学ぶ



「助けられる人」  
から  
「助ける人へ」

- ・故郷の復興や自分の将来のためどう生きるか
- ・人と関わりながら生き方を学び、人の役に立つ
- ・知識や技術を身に付け、災害にそなえる

## ②大雨・防災ワークショップ



盛岡地方気象台  
防災気象官 三上さん



- ・シミュレーションを取り入れ、大雨や土砂災害について学ぶ
- ・与えられた条件、限られた情報の中、自分たちで避難経路や避難のタイミング、避難場所を考える



# ③救命救急法講習

AEDを使った「心肺蘇生法」を体験



大船渡消防署から  
消防士さんと救命救  
急士 3名の講師



# ④学校にある物を活用して避難生活を工夫する

古いソパン箱で炊飯



テントを教室の中に設置



柔道用の畳



## ⑤防災キャンプから学んだこと (生徒の感想から)

- ◆ 災害に対する知識は、自分の命だけでなく周りの人の命を救うことができると思うので積極的に活用したい。
- ◆ 普段から災害の時にどうするか話し合い準備しておくことが大切だと気付いた。
- ◆ 去年の経験を活かして、自分たちで活動を計画できたのでそれだけ責任を感じた。
- ◆ 中学生の自分たちにもできることがあることを知った。



# 東海新報

## 8月26日

### 災害時の心構え学ぶ

#### 日頃市中で防災キャンプ

大船渡

大船渡市の日頃市中学校（村上洋子校長、生徒29人）で24、25の両日、「防災チャレンジキャンプ」が行われた。災害によって生徒が帰宅できないことを想定したもので、生徒たちは非常時の体験を通して、災害時の心構えについて学んだ。

同キャンプは、避難所運営や防災技術について学ぶことを目的に、昨年から実施。内閣府などが、防災教育の場の拡大や質向上に役立つ新しいチャレンジをサポートしようと実施している「防災教育チャレンジプラン」に2年連続で採択されている。

キャンプは、大船渡で震度7を観測する大地震が発生し、津波警報が発令されたのを受けて、警報解除が予想される24時間後までを学校で過ごすという想定で行われた。

1日目は、まず「防災講演会」が開かれ、岩手大大学院教育学研究科の森本晋也准教授が「災害を『生き抜く』ために」と題して講演した。東日本大震災前に中学校教諭として金石東中学校などで教鞭をふるっていた森本准教授は、同校の生徒たちから聞き取った大震災時の避難の様子などを紹介した。



続いて行われたのが「大雨災害ワークショップ」。盛岡地方気象台の職員の指導のもと、大雨や土砂災害時の避難方法についてゲ

ーム形式で学習した。このあと、生徒たちは校庭で夕食づくり。非常時の炊飯袋を使って、かまどで白米を炊いた。

昨年もキャンプを経験している2、3年生たちは上手に火を起こして煮炊き。完成後は、持ち寄ったレトルトカレーをかけて、ご飯をほおばっていた。

この日はさらに、夜間避難訓練として、生徒たちが数人一組になり校舎内外を歩いて「避難」。ほとんどの明かりが消された暗い校舎の中、グループ内で協力しながら、安全に移動するための方法を考えた。

新沼拓生君（3年）は「暗がりでは足元が見えないし、闇の中に

何が潜んでいるかわからない。こういう場面に出くわしたら、しっかりと気を付けて歩きたい」と、真剣な面持ちで話していた。

2日目は、朝食後に救命救急法の講座を開催。大船渡消防署員の指導により、ロープワークやAEDについて学んだ。

互野陽さん（3年）は、キャンプを振り返って「ご飯は固くてあまりおいしくなかった」と淡い表情。「（キャンプは）つらいところもあったけど、将来に向けて、良い経験になると思う」と話していた。

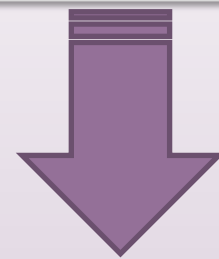
炊飯袋で米を炊く生徒たちⅡ日頃市中（電子新聞に別写真あり）



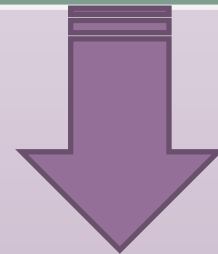
# 台風・大雨災害への備え



山間の狭い土地に  
川が流れる地形



川の氾濫による水害  
土砂災害を想定



- ・中学校体育館への避難(1次)
- ・より高台への避難(2次)
- ・安全な避難経路 ・役割分担



# 小・中合同避難訓練

9月1日「防災の日」

## 第1次避難場所「中学校体育館」



中学生が小学1, 2年生の手を引いて避難



## 第2次避難場所「藤原製作所」



特別養護老人ホーム「ひころいちの郷」  
のみなさん

見守ってくれた地域の方々と避難訓練に参加された老人ホームの皆さんに感謝



# 命を守る手を携え



水害を想定した避難訓練で高台へ向かう児童生徒＝1日、大船渡市日頃市町

## 防災の日 日頃市小、中（大船渡）が訓練

大船渡市日頃市町の目頃（目の1日、台風による大雨）市（村）上洋子校長、生徒（雨洪水被害を想定した合同27人）と日頃市小（佐藤利）避難訓練を初めて行った。康校長、児童72人は防災（関連記事24、25面）

育館への1次避難と、学校が独自に避難場所として定める高台の藤原製作所への2次避難を展開した。中学生はヘルメットをかぶり、低学年の児童の手を取り協力して避難し、22分か高台に到達した。日頃市小6年の新沼遼佳さんは「落ちて行動できた」と振り返り、日頃市中3年の鈴木愛美さんは「これまでと違う訓練だったけれど、しっかりと指示を聞いた。災害の時も素早く避難したい」と心に誓った。

西校は地震や火災の避難訓練に取り組んできたが、水害を想定した合同訓練は初めて。村上校長は「自分の命を自分で守れる人になってほしい」と期待した。

## 初の合同避難訓練

日頃市小・中 地域ぐるみで行動確認

大船渡



「防災の日」の1日、児童72人と日頃市中学校（大船渡市の日頃市小学校（村）上洋子校長、生徒27人）と日頃市小（佐藤利康校長、児童72人）は、日頃市町

内で合同避難訓練を行った。両校初の取り組みに、全校児童生徒、教職員のほか、地域住民ら合わせて約170人が参加。万が一の風水害が発生した際の避難行動を地域ぐるみで確認した。

合同避難訓練は、台風などによる大雨・洪水被害の発生時に児童・生徒一人一人が指示や避難路の状況に応じて、中学生と手をつなぎながら避難する小学1、2年生たちと日頃市町（電子新聞に別写真あり）

じて、すみやかに避難行動がとれるようにと初めて実施された。大雨洪水警報が発令され、同時に避難指示が出されたという想定で行われた訓練では、小学生が両校の定めた1次避難場所である日頃市中体育館に避難。人員確認後、中学生とともに2次避難場所となっている同町の（藤原）製作所に向かった。6年生児童を先頭に避難を開始。1、2年生児童は、中学生と手をつなぎながら、約900メートル離れた同製作所を目指した。避難路では、同町の防犯協会や交通指導隊のメンバーたちが子どもたちを誘導したほか、地域住民らが自主的に子どもたちの行列の後ろについて

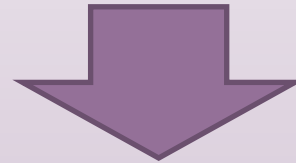
で良かった。このような状況になったら、早く避難を終えられるように行動したい」と、気を引き締めていた。日頃市中の鎌田慎副校長は「風水害の際の避難場所などは事前に決めていたが、実際に歩くのは両校とも初めて。訓練については、日頃市地区公民館に告知しておいたが、こんなに住民のみなさんに集まっていたんだ、ありがたかった。（避難所となった）藤原製作所にも感謝したい」と話していた。



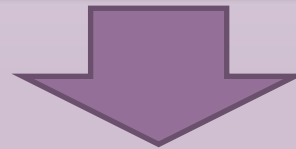
# 「ぼくのわたしの防災手帳」活用



東北大学災害科学研究所が開発  
岩手県内各社の協賛で、TV岩手が発行  
県内の中学1年生に配布



学校現場で授業にどのように活用するか？  
開発者の東北大学、今村教授が中学生対象に  
本校で授業(9月28日)



TV岩手が映像をDVD化し、県内の  
学校に配布、特別番組の製作  
「11月25日 テレビ岩手で放映」

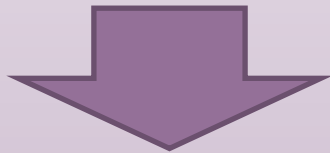
# 「テレビ岩手」の番組





# 家庭科の授業に生かす

災害時に水を大切にし  
健康的な食事を整える  
にはどうするか？



水の節約の仕方  
栄養を考えた食事  
何を備蓄しておくか



# 運動会種目に防災教育を取り入れる



- ◆ 応急担架をつくり、力を合わせて負傷者を運ぶ
- ◆ 非常持ち出し袋とヘルメット着用
- ◆ 障害物を乗り越え進む



ペットボトル  
で人間と同じ  
重さに

# 復興教育

- ◆ 地域資源を生かした復興への取り組み
- ◆ 中学生がふるさとを元気にするために活動する



# 被災地スタディツアー



奇跡の集落  
「吉浜」  
吉浜中の生徒が建てた  
石碑も見学



東京と仙台から来た中学生徒共に  
釜石「宝来館」のおかみさんから  
震災当時のお話を聞く



# 宝来館のおかみさんから学ぶ

- ①震災当時の孤立した状態を避難した方々で工夫して乗り越えたこと
- ②震災からの復興のためにたくさんの方々の励ましや応援があったこと
- ③あきらめないで生きることの大切さ、釜石・鵜住居の未来にかける思い
- ④津波の恐ろしさを後世に伝えていくこと、普段からの備えの大切さ



宝来館裏山への避難路



# 震災の記憶継承誓う

大船渡と東京、仙台の中学生

## 被災地巡り交流深める

大船渡市日頃市町の日頃市中(村上洋子校長、生徒27人)の全校生徒と東京都、仙台市の中学生は17日、大船渡市と釜石市で東日本大震災の被災地域を巡り、震災の教訓や復興の現状を学んだ。生徒たちは交流を深めながら震災や津波の記憶継承を誓った。

社会貢献活動を支援する日本フィランソपी協会(東京)が企画、主催する被災地スタディーツアーで、同校生徒と銀座中、両国中(東京都)、東北学院中(仙台市)の生徒5人の計32人が参加した。

大船渡市三陸町吉浜では、地元の吉浜中の生徒が2014年に震災の教訓のメッセージを刻み建立した津波記憶石を見学。村上校長は「中学生としてどう震災を伝えていけるか、自分



津波記憶石を見学し震災の教訓を学ぶ生徒たち

でできることを考えてほしい」と呼び掛けた。

初めて本県を訪れた両国中2年の谷口綾音さんは

「写真では見たことがあったが、実際に目にして本当に津波があったということを感じさせられた。東北の



# 絵本作家「指田 和」さんの講演



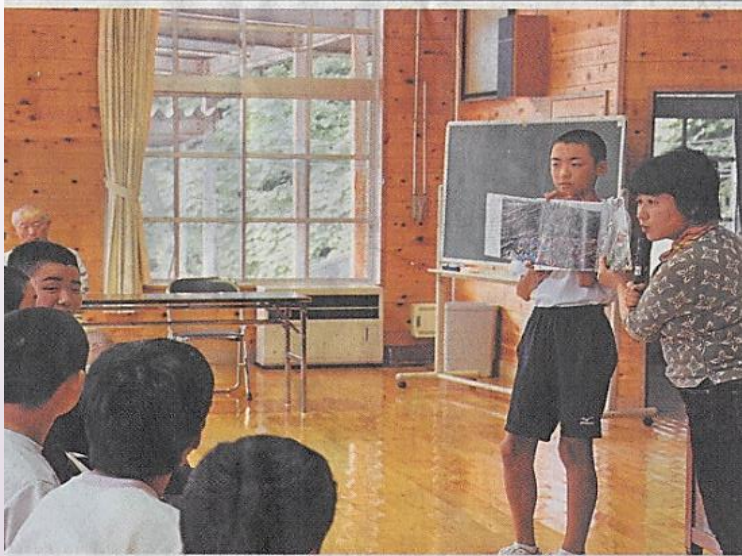
阪神淡路大震災をきっかけに、被災者支援活動に取り組む指田さんの生き方を学びました。



神戸のサンフラワーフレンズ21代表の「阿部 小夜子」さんから全校生徒にいただきました。

# 二つの震災語り掛け

絵本作家の指田さん



## 日頃市中(大船渡)で講話

### 東日本、阪神を題材に

埼玉県鴻巣市(ひのす)の絵本作家指田和さん(さしだ かず)(49)は21日、大船渡市日頃市町の日頃市中(村上洋子校長、生徒27人)で復興講話を行った。東日本、阪神の二つの大震災を題材にした絵本を執筆した指田さんは、生徒に命の尊厳と自分自身で行動することの大切さを訴えた。

指田さんは阪神大震災の実話を基にした「あの日をわすれない はるかひまわり」と、東日本大震災で「金石の奇跡」として知られる金石市の小中学生の避難行動を描いた「つなみてんてんこ はしれ、上へ!」を出版している。

当時、釜石東中副校長で避難行動に関わった村上校

長が、指田さんの絵本の取材活動を受け入れていたことから今回の講話が実現した。

講話で指田さんは、小中学生が互いに手を携えながら避難した当時の様子を紹介。子どもたちから聞き取ると、小学生は「手を握られて安心した」と話す一方、中学生も「本当に海が怖かったけど、小学生に励まされた」と互いの存在が避難に結びついたと指摘した。

「てんでんこ」の絵本内に村上校長が登場していることや、阪神大震災で亡くなった少女を題材にした「ひまわり」の内容も紹介しながら、「(自身は)震災で被災はしていないけれど震災を体験した人の話を聞き、私にできることを」

日頃市中の生徒に「つなみてんでんこ はしれ、上へ!」の内容を紹介しながら命の大切さを訴えた指田和さん(右)

している。皆さんも自分ができる、好きなことを見つけてください」と呼び掛け

た。  
鈴木花琳さん(3年)は「作者本人の話を聞けて貴重な経験ができた。校長先生の当時の話は詳しく知らなかったのも、もっと聞いてみたい」と興味を深めた。

東海新報 8月22日



# タオルハンガー作り「恩送り」プロジェクト



命の大切さ  
を伝える

- ◆ 復興支援、励ましと感謝の気持ちをこめて  
いただいた「恩」を次の人に伝える

# 「はるかひまわり」の子どもたちを 被災地に咲かせ 元気と笑顔を届けよう



◆ 阪神淡路大震災で犠牲になつた「はるか」さんのひまわりの種を入れたタオルハンガー。  
◆ 去年は被災地熊本と台風被害の岩泉に届けました。



# 被災地伝えるヒマワリ 大船渡

東日本大震災後、大船渡市内で花を咲かせているヒマワリが全国に被災地の思いを伝えている。同市日頃市町の日頃市中(村上洋子校長、生徒27人)は、阪神大震災をルーツに持つ種を使い、オリジナルの

タオルハンガーを製作。来校者に贈っている。同市盛町では被災した花壇で採れた種をポランティアが全国に広め、今年は地震被害を受けた熊本県にも届けた。

## 日頃市中

## 種入りハンガー配布

【日頃市中】阪神大震災で少女が犠牲となった建物跡で花を咲かせたヒマワリの種が起源。その実話を描いた絵本「あの日をわすれない はるかひまわり」の作者指田和さんが東日本大震災直後、釜石東中の副校長だった村上校長を訪ねて種を譲った。

村上校長は学校と自宅が流失し絶望の中にあったが、自宅跡と避難先の教員住宅の庭に種を植えた。すくすくと育つ姿に「後ろ向きだった気持ちが励まされた」と振り返る。

転任先の吉浜中と日頃市中の学校敷地でもヒマワリを栽培し、その種や綿をゴムチューブの中に詰め込んだオリジナルのタオルハンガーを製作している。来校者に配布しており、持ち帰った人は種を取り出して育てられる。近江優生さん(3年)は「ヒマワリを通じて支援への感謝を伝えたい」と張り切る。

震災や水害に見舞われた熊本県や岩泉町にもハンガーを届けた村上校長は「生徒には命の大切さを伝え、東日本大震災を語り継いでほしい」と思いを託す。



阪神大震災の被災地がルーツのヒマワリの種を使い、タオルハンガーを製作した生徒と村上洋子校長(左) 大船渡市・日頃市中

## 盛町

## 希望の大輪熊本にも

【盛町】震災直後、三陸中部森林管理署前の花壇に植えたヒマワリ約90本が今年も満開を迎えた。愛知県ポランティアが「被災地を忘れない」という思いを込めて種を全国に配り、震災の惨禍と復興の希望を伝え続けている。

ヒマワリは、2011年に同市盛町の更生保護女性の会会員佐々木紀子さん(76)が、同会を通じて種を譲り受け栽培。津波をかぶり、がれきを片付けたばかりだったが、同年夏には美しい花が咲き、多くの住民の心を癒やした。

12年には、同市を訪れた愛知県刈谷市のポランティアが種を譲り受け、地元で栽培。震災の風化防止を願い「刈谷発 咲かそう ひまわりの輪プロジェクト」として学校や家庭に種を配り、年々増え続けている。今年は地震で被災した熊本





# 小さな学校の 大きな夢！



- ◆ **大船渡市を元気にしたい**
- ◆ **みんなが笑顔で暮らせる街にしたい**
- ◆ **全校生徒で復興に貢献したい**
- ◆ **ふるさと大船渡を自慢できる町にしたい**
- ◆ **この町にみんなが住みたいと思うようにしたい**